

伝統文化交流事業inゆとろぎ

西多摩の三匹獅子舞

写真家 櫻井保秋が切り撮った二十年間の記録写真

特別展示・境の獅子舞獅子頭



江戸時代に伝承・四十地区で継承している伝統芸能

2014年1月11日(土)~19日(日) 10:00~17:00 (最終日16:00)

羽村市生涯学習センター ゆとろぎ 展示室 (無料)

主催:羽村市教育委員会 問合わせ:ゆとろぎ TEL 042-570-0707 (月曜休館)

後援:奥多摩町教育委員会 協力:境白髭神社氏子中・(株)ラボ東京・ゆとろぎ協働事業運営市民の会

特別展示 境白髭神社獅子舞・獅子頭 (奥多摩町境 祭礼日:8月16日)



境の獅子舞は、座元であった坂本家に寛文元年の『日本獅子舞の来由』の伝書があり、350年継承されている獅子舞です。獅子頭は大変貴重なもので女獅子頭の顎の裏に享保5年8月とあり、大切に守られているものです。

・獅子頭

王太夫(右):雄獅子。八角形の角2本。眉間に「王」の浮き彫り。

女獅子(中央):金色の丸い短い角、眉間に宝珠。

中太夫(左):雄獅子、小太夫ともいう。赤と黒のねじれた角2本。眉間に「中」の浮き彫り。

西多摩の三匹獅子舞

西多摩地区には各集落ごとで継承している郷土芸能が数多くあります。その殆どが江戸時代に伝承されたといいい、鎮守の祭礼で奉納されています。かつては現在のような医療もなく、厳しい自然、厳しい生活環境を生き抜くにはすべてが神頼み、1年の無事を感謝し、また1年の無事を祈願する祭りが必要だったのでしょう。それと同時にこの芸能が奥の深い芸事であり、最大の娯楽でもあったようです。

三匹獅子舞はその郷土芸能の大半を占め、現在でも40地区(奥多摩町14、檜原村7、あきる野市10、青梅市7、日の出町1、瑞穂町1)で継承され、7月から10月にかけての土、日曜日には必ず何処からか笛の音が聞こえてきます。しかしながら、なぜか、羽村市と福生市には伝承されていないようです。

三匹獅子舞は、腹に太鼓を抱えた二匹の雄獅子と一匹の雌獅子、4~6人のささら摺り、笛方、唄方で構成され、各演目にはそれぞれ三匹の獅子がおりなすストーリーがあります。獅子は笛や唄に合わせて太鼓を打ちながら動物特有の動きをし、神経質に時には凶暴に暴れ狂うので、西多摩では殆どの所が獅子舞は「舞う」とはいわず「狂う」といい、「獅子っ狂い」と表現しています。この特徴ある演技は、一生かかっても満足出来ないと言われるほど奥の深いもののようです。

祭りの当日は、神社に奉納したあと集落こぞって楽しむ娯楽となります。集落の人たちは、生まれた時から笛の音を聴き、毎年毎年、獅子舞を見て育っていますから獅子舞の全てを熟知しており、演じる者は最高の演技を、観客は笛の音に体を合わせ、獅子の巻き起こす風にあたりながら1年の無事を獅子に託し、それなりの評価をして楽しみ、「やっぱり俺んこの獅子が一番だ!」と満足して家路に着きます。この「俺んこの獅子が一番だ!」という言葉で表現されているように、三匹獅子舞は集落の誇れる共有の財産であり、奥の深い芸事であり、最大の娯楽であるからこそ長きに渡って継承されてきているのではないのでしょうか。

そうは言っても、時代と共に過疎化による後継者問題、都市化による結束の崩れ、娯楽の多様化など、今後の継承に諸問題が浮上してきているのも事実です。

~平成5年3月、「東京都民俗芸能大会」講演にあたっての櫻井保秋の下書き原稿から~

櫻井保秋プロフィール

- ・1937年、静岡市生まれ。日本写真短期大学(現・東京工芸大学)卒。
- ・テレビ、雑誌、新聞などの写真業務に従事。(日本写真家協会会員)
- ・1979年、羽村市に移り住む。
- ・1983年、奥多摩で初めて三匹獅子舞に出会う。これを契機に手探りで西多摩各地の祭を訪ね歩き、ライフワークとして「西多摩の祭り」の撮影を始める。その数の多さと奥の深さに感銘し、後世に記録を遺すことを目的に20年間撮影し続けたが、2002年9月、志半ばで生涯を終える。

写真集 『獅子の風 東京西多摩・三匹獅子舞』

『玉川上水 水と緑と花の径』『玉川上水の野草たち』他



問合せ 羽村市生涯学習センター ゆとろぎ

羽村市 緑が丘 1-11-5

TEL 042-570-0707